

## 卷 頭 言

理事長 磯 野 謙 治

日本気象学会は会員数2800名を越え、会員の研究活動は年を追って活発となり、機関誌の、気象集誌、天気、質、量ともに充実してきましたことは喜ばしいことです。

近年の科学技術の発展は著しく、人類の物質的生活水準の向上に大きな役割をしてきました。しかし、最近これに伴って起こる環境破壊の問題が重大化し、科学、技術のこれに対する責任が問われています。気象学は元来“大気の科学”であり、これまで人類の重要な環境因子である天気、気候の問題を主な研究対象としてきました。従って気象学者は環境問題について過去においても大きな関心をもち、また多くの貢献をしてきました。しかし、最近の環境問題に関する気象学者のかかわり方は必ずしも十分であるとは言えないと思えます。このことは、たとえば大気汚染などの問題について直接発言し、あるいは研究を行わなければならないということを行うものではありません。むしろ、気象学は大気の科学であるという広い立場から、基礎的研究を進め、その基礎の上に立って環境問題解決への提言をすべきで、将来の地球環境に関する推測はむしろ慎重にすべきでありましょう。この観点に立つとき、近年の気象学の著しい発展にもかかわらず、われわれ人類の大気に関する知見は未だ極めて乏しいものと言わざるをえません。大気中で生起する個々の素過程、大気物性、大気中の微量物質に関する研究、これらを考慮した小、中、大規模の大気の運動に関する研究を今後強力に発展させる必要があります。従来、気象学の中では重視されていなかった因子をも考える必要があり、学問の他の分野の最近の発展を取り入れ、あるいは他の専門分野の研究者、特に気象学以外の専門の課程を学んだ若い研究者が大気の科学としての気象学の分野で活動することができるような状態をつくる必要であると考えられます。気象学—天気予報の図式に重点をおき過ぎることはむしろ学問の発展を阻害することになり、たとえば環境問題に限っても今後新しく発生する諸問題の解決に積極的な寄与をすること

を困難にします。従来わが国の研究者はすでに提起された問題の解決には優れた才能を発揮するにもかかわらず、新しい事実を発見し新しい問題を見出し新しい分野を発展させる点に欠けるところがあると言われていますが、気象学の場合この欠点を克服するために、若い研究者がこれまでの学問の発展の基盤の上に立ってしかも既存の気象学の概念にとらわれず自然の中から新しい法則性を見出すようつとめられることを期待しております。

一方気象学自体の発展と人工衛星を含む新しい技術の開発は巨大科学としての気象学の発展を要請しています。このために、新しい国際協力観測研究を必要とし、現にその一つの計画として GARP (地球大気開発計画) が実施されることとなり、日本もその責任を果すことになりました。われわれは積極的にこの計画の推進を行なうとともに、さらに将来の新しい計画をつくる基礎となる素過程の研究を含む基礎研究を進める必要があります。素過程の正確な知識なしには大規模な現象の正確な理解はできないでしょう。

日本気象学会の当面する重要な問題に学会財政に関することがあります。前にも述べましたように気象集誌、天気が充実し紙数も増大しましたが、一方、財政的には極めて緊迫した状態にあります。会費に対する会員への機関紙頒布による還元率は他の学会に比し高い点は大変結構なことでありますが、反面、印刷代、郵送料等物価の高騰、また事務局職員の待遇の近代化を確立するために要する経費を考えると、財政に関して抜本的な新しい運営方針を立てて進まなければならないと考えられます。会員の経済負担を増すことを極力おさえ、しかも学会活動を盛にするという困難な問題解決の方法を理事会において現在鋭意検討中であり、またその一部を実施に移しつつありますので会員各位におかれましては、この点をご理解頂きご協力をお願いすると共に、学会運営についての積極的なご意見を賜りたいと存じます。